

### 37 当科における自己免疫性肝炎に合併した肝細胞癌の検討

大橋 和政・土屋 淳紀・松田 康伸  
市田 隆文・野本 実・青柳 豊  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
消化器内科学分野

近年非ウイルス性肝疾患の発癌頻度について様々な議論がなされている。今回、当科におけるAIHに合併したHCCについて検討を試みた。ウイルス性疾患を除外したAIHにおいてHCC発症は稀であるといわれているが、当科に入院したAIH患者39人中、6人にHCC発症が認められた。内4名がAIHにたいして免疫抑制剤を使用しており、4名がHCC発症時背景肝は肝硬変であった。AIH症例においては、肝硬変例は勿論であるが、肝硬変と言いきれず、また、トランスアミナーゼが低値にコントロールされている症例においても免疫抑制剤、ステロイドの使用の有無にかかわらず発癌を視野に入れた経過観察が望ましいと考えられた。PSL等によりトランスアミナーゼが低値に保たれ、肝機能が十分保たれている症例においても肝癌は発生するが、肝癌に対して十分な治療が行われる例が多い傾向があった。

### 38 胆管細胞癌を合併した自己免疫性肝炎の1例

山本 幹・上村 顕也・高橋 達  
市田 隆文・野本 実・青柳 豊  
山本 智\*・佐藤 好信\*・佐藤 明人\*\*  
新潟大学大学院消化器内科  
同 消化器・一般外科\*  
同 分子・診断病理\*\*

症例は51歳女性で肝機能異常につき95年に精査し自己免疫性肝炎(AIH)による肝硬変(LC)と診断された。UDCA内服にて経過観察されていたが、2002年4月より腹水、黄疸、全身倦怠感が出現し内科的治療に反応しないことから加療目的に7月22日当科入院となった。入院時、総ビリルビン28.4, CA19-9 264, CEA 405.7と著明な上昇を認めた。各種検索より胆管細胞癌と診断されたが全身状態は悪化し第25病日に死亡退院された。

病理解剖にても同所見であった。AIHと胆管細胞癌の合併報告例は本邦で3例でいずれもステロイドの投与はされておらず肝硬変であった。胆管細胞癌の原因として持続する胆管炎や肝硬変が考えられており本症例でもステロイドや免疫抑制剤による肝内の炎症の十分なコントロールが胆管細胞癌の発生予防に重要であった可能性が示唆された。

### 39 原発性胆汁性肝硬変に肝細胞癌を合併した1剖検例

大嶋 智子・横田 隆司・小林 由夏  
飯利 孝雄・七條 公利  
立川総合病院消化器内科

今回HCC発見を契機に、その基礎肝疾患としてPBCが考えられた1剖検例を経験したので報告する。症例は59歳女性。黄疸を主訴に受診。血液化学検査では胆道系優位の肝胆道系酵素の上昇。ANA 80倍, AMA 20倍, 抗M2抗体46.3倍, 腫瘍マーカーAFP 700ng/ml, HBs-Ag(-), HCV(-)。腹部CT像で肝右葉後区域に5cm, S4に4cm, S3に1cm大の多発肝腫瘍を認めた。臨床的にはPBCに合併したStage IV-a期のHCCと診断。Best Supportive Careの方針とするが35病日にて永眠。剖検を施行した。癌部は中分化型で基礎肝疾患は胆管の消失と門脈の狭小化, 軽度の細胆管増生を認めたが門脈域への小円形細胞浸潤および限界版の破壊が著明で慢性肝炎活動性類似の所見を合わせもつ, PBCとしては特殊な組織像を呈していた。この事と発癌との因果関係について今後検討していく予定である。

## II. 特別講演

「増殖因子トランスジェニックマウスを用いた消化器病研究」

群馬大学医学部第一内科  
高木 均